

# 設立十周年を迎えた笹川日仏財団

DE LA FONDATION FRANCO-JAPONAISE SASAKAWA/Bureau de Tokyo

# La Lettre



笹川日仏財団  
ニュースレター  
Vol. 4 No. 2

当財団は、1990年3月23日フランスの公益法人として設立され、これまで日本とフランスの間の友好と相互理解を促進するための様々な事業を実施してまいりました。

共同研究のための日仏の学者や専門家の交流事業で占められています。対象分野はサイエンスから社会、文化まで多岐にわたっています。芸術分野への支援も総額の35%強(87件)にのびりました。そのうちの42%がタン



当財団を設立した日本財団の笹川理事長夫妻と元下院議員で当財団理事のルッセ・ルアール氏

これまで何百人もの若者が日本に滞在し、ホームステイをしながら日本文化を学んだり、日本人との友情を深めました。また全助成金額の約30%(79件)は、学術会議の開催や

スや演劇などの舞台芸術に集中したことは特記に値するでしょう。本年は設立10周年にあたり、年間を通じていくつかの比較的規模の大きい記念プロジェクトを計画しています。去る5月17日にシャトレ劇場で開催された

記念ガラもその一つで、日本人アーティストによる西洋クラシック音楽と日本の縄文鼓の即興演奏、日本に興味のあるフランス人の若者を対象としたコンクールグランプリ・ササカワの優秀者15名への授賞式が行われました。

当夜のプログラムは、当財団が派遣し、シャトレ劇場に今年一月から研修を行っ

ている実習生、増田貴代子さんと(メソソプラノ)と飯坂純さん(ピアニスト)のフランス近代歌曲、ラベルのシエラザードの演奏で幕をあげました。観客のほぼ9割がフランス人という状況で、日本人の実習生がフランス語の歌曲を歌う試みには相当の勇気が必要だったことでしょう。世界へ羽ばたくためのひとつの試験として今後活かしてもらえればと思います。

次いで、日本の若手ピアニストとして、世界各地のオーケストラとの共演で現在注目を集めている児玉桃、麻里姉妹によるパッサ、ショパン、ルトスラウスキーの2台のピアノのための作品3曲が演奏されました。児玉姉妹の高い技術と芸術性に多くの観客が魅せられていたことをご報告したいと思います。



パリ市立シャトレ劇場

ガラの最後を飾ったのは、ピーター・ブルック・カンパニーの音楽監督を10年間務めた土取利行氏による

縄文鼓の演奏で、これは同氏の、10年にもおよぶ日本の古代の首への探求の成果ともいえるもので、海外では初の演奏会となりました。

日本とフランスは、共に長い歴史と伝統、文化を持つ国です。今後は共通の課題と多くの類似性を見出すことのできるこの両国が協力しあつことにより、21世紀における新しいパラダイムを築いていけるのではないでしょう。当財団は特に「若者」と「地方」に注目をします。みずみずしい感受性と輝く目をした「若者」達と豊かな文化を守り続けてきた「地方」。ここに私達の未来を考える「糧」があるように思われます。このような思いでこれからも活動していく所存でございますので、皆様のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

# 四五〇〇年前の 音が語る意味



笹川日仏財団設立十周年記念公演として、世界的に活躍するパーカッションニスト、土取利行(50)さんが、パリの市立シャトレ劇場で5月17日、日本人で初の縄文鼓の演奏を披露。帰国後お話を伺ったが、話は縄文の音だけにとどまらず、現代の日本人のあり方までに及んだ。一万年という長い期間に育んできた縄文文化にこそ日本人の感性の根源があるという。

## 「奈良」時代までの日本の音を舞台に上げる者です

ことは簡単です。しかし縄文となれば話は違ふ。下手をすれば笑い者です。

国際化という言葉が言われて久しいが、世界の人々が出会っていくときに問われるのは、自国のアイデンティティの在処だ。それを持って始めての交流が成り立つのだらう。

日本の伝統芸能を海外で披露するときにも、単なる過去の芸能の再現にとどまらず、その技術や精神を持って現代を表現することで、始めて伝統が革新となる。しかしこれほど難しいことはない。まして縄文という原始的で劣等というイメージの強い時代の文化を表現する難しさは、私たちの想像を越えたものがある。

パリでの演奏を終えて土取さんが最もうれしかった感想は「今回の演奏は、笑えなかった」というものだったという。

それはともすれば演奏が、子供じみた安っぽい、お遊びのような演奏になりかねないというフランス人の期待を見事に裏切った結果の表れである。

今回の演奏は、フリージャズの演奏家としての経験から得た卓越した技術を屈指し、縄文土器との出会いに生じた疑問を真摯に受けとめて学んだ十年間の考古学の知識を背景に、現代音楽のパーカッションニストとして土取さんが培っ

てきた力を総動員させたものだったのだ。

「演奏後、パリの人々には「自分たちのやらなければならぬことをやってくれた」とも言われました。つまり現在のフランスでの音楽史は、一般的に16世紀以降しか語られていません。日本にはまだアイヌなどの土着文化が残り、それを許容する力がありますが、フランスでは音楽と考古学は完全に切り離され、音のルーツを辿る必要性



を感じてはいても誰一人として実践する人はいないのです」

縄文時代を思わせる衣装を身に纏った彼が一人登場して始まった演奏である。さすがに最初は戸惑いを隠せない聴衆だったが、その音に一気に呑み込まれるように聞き入っていく様が、手に取るようにわかった演奏会となった。

西洋音楽の殿堂である劇場に、縄文鼓の音が鳴り響く。それは東西

の音楽史の上からみても画期的なことである。

たかが太鼓、されど太鼓。それは最も古く、そして新しい音楽だったのである。

### 縄文の音は 儀礼であり、 祈りだった

縄文土器の中で  
も、口縁部が水平  
で周囲に小さな孔  
が開いている土器  
を有孔罎付土器と

呼ぶ。長野・八ヶ岳周辺を中心に、東日本各地で出土している。

考古学では、太鼓説と酒を造る醸造具説にほぼ分かれているが、土取さんは太鼓と確信し、八九年から陶芸家や考古学者らと共に復元作業を始めたのだ。そして八ヶ岳山麓で初めて縄文の打音を新月の夜空に響かせてから、ちょうど十年の歳月が流れた。

縄文鼓を演奏することは、新しい文化に触れることである。そしてそれによって、私たち現代人がいかに音楽に対して一つの概念に縛られてきたかを逆に知らされたと土取さん。一つ一つその謎が解かれるように、いつのまにか縄文に行き着いたのだ。

たとえば音楽といえ、現代人の私たちにとっては鑑賞するものではない。しかし本来、音楽は生活の必然として存在していた。縄文時代の音は儀礼であり、祈りであった。しかも狩猟の安全を祈るときには、同時に母の背中で眠る子には子守歌ともなっていたのである。

「音楽は民族の文化、歴史、社会などそれぞれの場面と結びついて成立していますから、音楽性も一括りにはできません。音色、高低、強弱など実に多様性に富んでいます。」

しかし現代人は音を個人との関わりでしか持っています。ウォークマンなどは、その典型。これほど狭く貧しい音との関係はないのです。」

音楽は、個ではなく村などの共同体全体が所有するものだったのである。まず人間がいて、伝えあって存続していた。そこから日本人の感性は培われてきたという重要な要素があるのだ。

### 日本人の豊かな音楽性を失わせたのは音楽教育だ

私たち日本人が本来持っていた感性が急速に失われていったのは戦後の高度経済成長の時代

だと土取さんは強調する。人間主導だった音楽から電化された音楽へと取って代り、音楽教育という名の元に急速に加速度を増して西洋音楽一色となった。

「世界中の民族音楽を自分の足で辿っていったときに、各々の土地の人々と呼応することができたのは、私自身が幼い頃に祭り太鼓を学んだ経験を持つからでした。それは村の古者たちから一対一で教えられた体験です。少年時代電灯も何もない夜の畔道を一人、歩いて神社まで行った道すがらは私のベース。

そこから闇の世界があり、音楽の持つ深さや力を知りました」

こうした私たち日本人が本来持っていた豊かな音楽性を失わせた罪は祭の音楽を排除し、音楽とはメロディ、ハーモニー、リズムの三要素だと教えた明治以降の日本の音楽教育にあった。

これを土取さんはあえて「音楽を誤解する三つの種」と言っている。

世界で音楽を知るほどに、西洋音楽はごく一部であり、西洋のように平均律も何も持たないで自然発声法的に各自が自由に歌い、妻でながらも美しく調和していたのが日本やアジアの音楽だった。

特に日本の音の基本は、ポツン、ポツンと雨だれが刻む雨だれ拍子と呼ばれる一拍子だという。仏教の僧侶が読む読経も木魚の一拍子に依って

いる。また日本の音楽の場合、その中心は「歌」にあるという。共同体を単位としていた我々の祖先は、それぞれ共有の伝説などを語ることで、互いの絆を強固にできま

のです。だからこそ語り部が日本の音楽の歴史の中で主要な位置を占めてきました」

しかし明治からの西洋崇拜のシステムによって、その歴史は見事に分断された。そもそも日本音楽は言葉と音が密接に繋がっている。にもかかわらず、音楽だけは西洋



のものを取り入れ、言葉は日本語を残すという「接木」だらけの音楽をつくりあげてきたのである。

それは一世紀という時間の中で日本人の心と理性のバランスを崩す原因となった。そうすることで現代日本人は文化に対して自信を失ってしまったのだ。

### 縄文の心に、現代人が学ぶべき哲学がある

縄文時代の最大の魅力は、一万年という長い年月の間、狩猟採集文化を保ってきた持続力にあるという。

それは、自分たちの心の有り様の喜怒哀楽を感じていく深みにこそすべての価値を置いた文化だ。そしてその重要性を維持し伝達することに心血を注いだ。それは、現代の表に見えるもの、書かれていない歴史にのみ置いてきた価値感をもう一度根底から洗い直させてくれる。

戦後、めざましい経済発展を遂げた日本が、いま先行き不透明な時代を迎え、多くが不安を抱いているのは、その豊かな感性に対して自信を失っているからだ。土取さんは指摘する。

たとえ経済力を失っても文化的プライドさえ持っていれば、その危機を乗り越えることはできる。そしてまたその文化的アイデンティティは、厳しさの中からも生まれないとも。

「縄文の人々の平均寿命は三十歳です。その短い人生の中で、すでに十代で男も女も厳しい通過儀礼の儀式が行なわれます。男ならば、森の中に一人で行かされて闇の中で物の怪の恐怖と闘い、獲物を得ていくという試練を与えられます。それを通過して始めて共同体の中の個としての自立できたのです」

縄文人にはこうした生きる上での確固とした基本姿勢がある。それは、死に対する意識から生まれている。この縄文の心は、現代を問いたです上で、学んでいかなければならない哲学となるだろう。そしてまたそれを実践する行動の必要性を解いた。

しかしそのときに、すでに個人の力には限界があることも土取さんは経験で知っている。今こそ文化行政が、歌舞伎や能だけではなく日本民俗芸能をもう一度掘り起こし、劇場など外枠ではなく、その内容を創造しなければならぬ。

「日本音楽の心のはすがは、一体どこにあるのか」グローバルな時代を迎え、民族を越えて人間としての芸術を生み出すときに、縄文の持つ普遍性と特殊性の両面を世界に向けて打ち出していくことは、今こそ大いに意味のあることである。今回のパリの公演は、その先駆けとなったのである。

#### 土取利行

70年代より近藤等則らとフリージャズで音楽活動をスタート。76年よりビクター・ブルック国際劇団音楽監督として活躍。「マハーバーラタ」などの作品を手掛ける。同時に世界各地を訪ね民族音楽の造詣を深める。80年代より古代三部作CD『銅鐸』『サヌカイト』『縄文探訪』を発表。日本音楽の源流を探究。88年、岐阜県郡上八幡に桃山晴衣と「立光学舎」を設立。地域の伝統音楽振興に力を注ぐ。

## フランス人が最も好きな海水浴地は

### ブルターニュ

7月。文月である。夏休みである。バカンスである。そこで、フランス語の電子日刊紙『ル・プチ・ブーケ』に掲載されたフランス人が最も好む海水浴地についての記事をご紹介します。

同誌によると、フランスのリサーチ会社IPSOSが月刊誌『ボン・ヴォヤージュ』（アシエット社）のために行った調査では、18歳以上の対象者1013名のうち、総合評価で21%のフランス人がブルターニュを選んだという。その後、コート・ダジュールの17%、アキテーヌ/バスク地方の15%、ヴァンデ地方、シャラント・マリ

みのない地域だが、「歴史文化遺産」では、ユネスコの世界遺産に指定されているモン・サン・ミッシェルがあるノルマンディ地方の20%に大きく差をつけ、約3人に1人のフランス人がブルターニュを選ぶ結果となった。

また、風景の美しさでも29%を記録、2位のコルシカ島の19%を上回った。さらに「価値感」が25%、「受入の良さ」でも22%とブルターニュと答えた人の数が一番多かったのである。昨年冬の重油汚染でダメージを受けていたブルターニュの人々にとっては朗報だろう。一般の日本人観光客にとってはまだ馴染みの少ない地域だが、2度目3度目の渡仏の際には是非訪れてもらいたい場所だ。特に女性は本場のタランテラビーをじっくりと体験することもできる。

しかし、夏といえばやはり太陽と解放感である、と考える人々にとって最も好ましい地域はやはりコート・ダジュールであった。「天候の良さ」の項目で41%、「お祭り気分が味わえる」で28%ものフランス人がこの地域を最高だ

と答えている。多くの日本人にとってもフランスの夏の海水浴場といえば、紺碧海岸の風景を思い浮かべるのではなからうか。その他、美食の魅力においてはアキテーヌ/バスク地方が、海岸の美しさにおいてはヴァンデとシャラント・マリタイム地方がトップ。あなたならどこを選ぶ？



海水浴客でにぎわうカンヌのビーチ

写真提供：フランス政府観光局

## A propos de nos projets...

最近の事業から

### 2000年度追加助成事業が決定しました

去る5月15日、メネルプで行われた当財団第22回理事会にて、東京事務局の2000年度追加助成事業3件が次のとおり承認されました。

日仏パネル  
ディスカッションの開催 3

助成先：日仏経済交流会

(パリ・クラブ)

助成承認額：...

一、三〇〇、〇〇〇円

日仏の経済界、学会、メディアなどの横断的な分野の実力者を集め、活発な討論と出会いの場を提供するプロジェクト。

本年度は、グローバルゼーションと

コーポレート・ガバナンス(6月)・

少子高齢化と移民労働力の展望

(9月)・金融・財政・税制の日仏事情

とeコマース(12月)という3つの

テーマで開催が予定されています。

フランスからの

美術留学生研修奨学 3

助成先：清春白樺美術館財団

助成承認額：三、〇〇〇、〇〇〇円

才能ある若手のフランス人アーティスト3名を招聘し、清春芸術村の

アトリエおよび周辺にて研修制作を

してもらおうプロジェクト。また滞在

中は、清春白樺美術館の学芸員によるシラカバに象徴される近代日本美術の歩みを学び、フランスの近代美術との比較研究をします。なおアトリエで制作した作品は、東京の画廊で発表します。

「源氏物語」をテーマとした

シンポジウム

助成先：源氏物語千年祭推進委員会

助成承認額：一、〇〇〇、〇〇〇円

2000年11月にパリでシンポジウムを開き、「源氏物語」を紹介すると

ともに、その背景をなす文化と精神、

またそこから派生した芸術についての

講演、異文化の中での「源氏物語」

を討議します。

### プロジェクト・カレンダー 2000年7月～9月

8月22日～9月17日

《アフィッシュ・フランセーズ》

「戦後50年のフランスボクサーの歩み」

アフィッシュ・フランセーズ展

実行委員会/於東京

9月中旬

《日仏コミュニケーションアート》

「世界遺産サリヌ・ロワイヤルでの

サリヌ・ロワイヤル・アート

イマジン・プロジェクト

於アーク・スナン(ドゥーブ県)

9月下旬

《日仏パネルディスカッション》

「少子高齢化と移民労働力の展望」

パルク・フ/於東京

## Petite note

編集後記

日本では連日夏日が続いているが、フランスでは24時間自動車耐走レースで有名なル・マンの北約50kmにある町で、パリ祭前日の朝、撰氏4を記録したとか、渡仏をご計画の方は服装にご注意を。

(M)か。

笹川日仏財団ニュースレター

## La Lettre

2000年7月発行 Vol. 4 No. 2  
 発行人：富永 重厚  
 編集人：関 晃典  
 発行：笹川日仏財団  
 〒108-0073 東京都港区三田3-12-12  
 TEL：03 (3769) 6252  
 FAX：03 (3769) 2090  
 E-mail：matsugam@spf.or.jp  
 http://www.spf.org/ffjs/